

里耶秦簡 8-660 簡釈読覚書

石原遼平

『里耶秦簡(壹)』¹で公開された 8-660 簡は報償の受け取りに関連して、都郷から県廷に送られた文書だと考えられる。この簡は図版によって現行の釈文を修正できる部分があるため、以下にこれを示して当該簡を利用する者の参考に供したい。

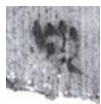
1. 現行釈文

『校釈 1』²の釈文に何有祖³の指摘を加えたものが、現在最も精度が高い釈文であるため、ここに引用する。

卅（三十）五年八月丁巳朔丙戌，都郷守□
士五（伍）免詣少内，受購⁴。●今□□ （8-660 正）
九月丁亥日垂入，郷守蜀以來。瘳□ （8-660 背）

2. 新たに校訂できる文字

現行釈文では正面 2 行目末尾の文字は未釈読を示す「□」とされている。図版によれば当該字は〔図①〕のようになっており下半が欠けている。残存部分を 8-2217 や 8-1090 等の「遣」字と比較すると同じ形状であることがわかる。また、文脈からも「遣」で不自然な点はないため、「遣」と釈読して問題ないであろう。



〔図①〕



遣 (8-2217)



遣 (8-1090)

3. 校訂後釈文

校訂後の釈文は以下のようになる。

卅（三十）五年八月丁巳朔丙戌，都郷守□
士五（伍）免詣少内，受購。●今遣□ （8-660 正）
九月丁亥日垂入，郷守蜀以來。瘳□ （8-660 背）

附記：小文は、アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「簡牘学から日本東洋学の復活の道を探る——中国古代簡牘の横断領域的研究（3）」における議論を踏まえているほか、科学研究費（基盤研究 B、課題番号 16H03487）「最新史料の見る秦・漢法制

の变革と帝制中国の成立」の研究成果を含む。

¹ 湖南省文物考古研究所編著『里耶秦簡（壹）』文物出版社、2012年1月。

² 陳偉主編，何有祖、魯家亮、凡国棟撰『里耶秦簡牘校釈（一）』武漢大学出版社、2012年。

³ 何有祖〈読里耶秦簡札記（二）〉（簡帛網、2015年6月23日、http://www.bsm.org.cn/show_article.php?id=2257）

⁴ 「購」は原釈文および『校釈1』は未釈読であった。何有祖は注2札記において図版から「購」と釈読できることを指摘している。